

奈良県御所市

名柄遺跡 第4次 発掘調査報告

平成7年（1995年）

奈良女子大学蔵書



961007701007

御所市教育委員会

210.2

96

奈良^{ごせし}県御所市

名柄^{な がら}遺跡 第4次 発掘調査報告

平成7年（1995年）

96100770

御所市教育委員会

例言

1. 本書は、奈良県御所市大字名柄147-1ほか3筆で実施した、名柄（ながら）遺跡第4次発掘調査報告書である。なお、名柄遺跡は奈良県遺跡地図では、第3分冊「16-B-181」に相当する。
2. 調査は、葛上農業協同組合の委託を受け、御所市教育委員会が実施した。現地調査は、平成6年4月4日着手、同年4月26日に終了した。
3. 現地調査は、御所市教育委員会 技術職員 木許 守が担当した。調査作業員として、地元有志11名の参加・協力があつた。遺物整理・本書作成には、木許のほか、藤村藤子、尾上昌子、木村美幸、榎原静代、藤井浩子、戸村和子、中久美子、城本宏代、井戸川愛、宮本明子、倉本康司が参加した。また、現地調査および本書作成に際して、同会 技術職員 藤田和尊の協力を得た。
4. 製図は、遺物を藤村が担当し、その他を木許が担当した。
5. 本書の執筆・編集は木許が行つた。なお、遺物観察表の調整の欄は木村が担当し、木許が補正した。また、胎土の欄の作成には藤田の協力があつた。
6. 土器観察表および文献註・補註は、本文末に一括して掲載した。
7. 出土遺物実測図の縮尺は、土器を1/3に、石製品を1/2に統一した。文中の遺物番号は、挿入図版中の番号ともすべて統一した。
8. 第4図に示した「北」は磁北である。
9. 現地調査に際して、榎原考古学研究所 泉森 皎氏のご教示を得た。記して深謝致します。
10. 現地調査および本書作成に際しては、事業者である葛上農業協同組合代表理事組合長 永田正利氏をはじめ関係各位の全面的なご理解・ご協力を頂いた。記して深謝致します。

本文目次

第1章 位置と既往の調査	1
1. 位置と環境	1
2. 既往の調査	2
第2章 調査の契機と経過	4
第3章 調査の成果	5
1. 層序と旧地形	5
2. 遺構	6
3. 遺物	8
第4章 まとめ	14
文献註・補註	20

挿図・表目次

図版目次

第1図 周辺遺跡分布図	1	図版1 名柄遺跡 航空写真（東から）
第2図 調査地位置図	2	図版2 1区全景（西から）
第3図 第2次調査出土の木製品	3	2区全景（東から）
第4図 調査地平面図および断面図	折込	図版3 出土遺物1
第5図 出土遺物1（1区第4層）	9	図版4 出土遺物2
第6図 出土遺物2（2区4a層（その1））	10	図版5 出土遺物3
第7図 出土遺物3（2区4a層（その2））	11	
第8図 出土遺物4（溝1）	12	
第9図 出土遺物5（溝3）	12	
第10図 出土遺物6（ビット54）	12	
第1表 ビット計測表	6	
第2表 出土土器観察表	15	

第1章 位置と既往の調査

1. 位置と環境

御所市は、奈良盆地の西南部に位置しており、西部には葛城山・金剛山の峻峰がそび立ち、南部は竜門山地の西部にあたる巨勢山丘陵などの丘陵が起伏している。

名柄遺跡(1)は、葛城山・金剛山の東麓斜面の傾斜変換線上に立地する。遺跡からは北東方向に盆地の平野部が眺望できる。またこの2つの山の間を縫うように走る道は水越峠をへて河内に通じるが、遺跡はまさにこの道に面して営まれている。今次調査地は、この名柄遺跡の北端部に位置し、遺跡が占地する微尾根から、北限を画するとみられる水越川に下る傾斜変換地点にも相当する。

名柄遺跡周辺の古墳時代の遺跡は、集落跡では、前期の橿原遺跡(2)や、時期的にそれより遅れる中西遺跡(3)が知られるほか、近年中期中葉以降の佐田(4)・南郷(5)・下茶屋(6)などの各遺跡で遺構が検出されている。古墳では、御所市域では、大字原谷字ヲサカケ所在の車輪石や石裂合子などが出土したと伝えられる古墳(8)があるものの、近辺に前期古墳は知られない。しかし、中期前葉には、遺跡の東約2kmに全長238mの宮山古墳(7)が築造される。中西遺跡はこの宮山古墳には併行する時期の集落として注目される。大形前方後円墳としては、この後、中葉から後葉の全長149mの掖上鍾子塚古墳(8)があるが、その後は御所市域では途絶える。また宮山古墳の背後(南)の丘陵には、総数800基にもおよぶ巨勢山古墳群(9)の存在が知られる。



第1図
周辺遺跡分布図
(S. = 1/50,000)

1. 名柄遺跡
2. 橿原遺跡
3. 中西遺跡
4. 佐田遺跡
5. 南郷遺跡
6. 下茶屋遺跡
7. 宮山古墳
8. 掖上鍾子塚古墳
9. 巨勢山古墳群

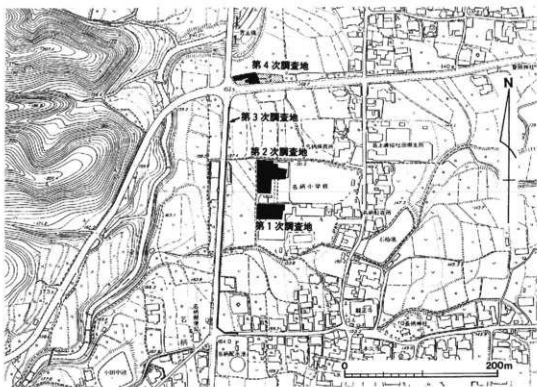
2. 既往の調査

従来、名柄遺跡は銅鐸・銅鏡の埋納地として著名であった。これは、大正7年に、大字名柄字田中に新溜池を造るに際して偶然出土したもので、地下約0.9mの所に約30cm離れて埋納されていたという。銅鏡は多鈕細文鏡であった。銅鐸は外縁付鈕Ⅱ式で、弥生時代中期の所産と見られる。

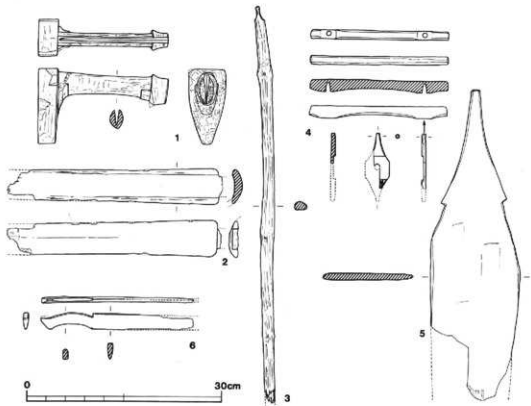
発掘調査としては、これまでに3次にわたって実施されている。いずれも古墳時代の遺構が中心となり、銅鐸・銅鏡の埋納遺構とは、直接の関係は無いものである。

第1・2次調査は、昭和62年12月～翌1月および平成元年4月～8月に実施された。名柄小学校の増改築に伴う事前調査である。検出した遺構は、TK23～MT15型式併行期の、石垣を伴う濠の一部・工房跡と見られる竪穴住居1棟・土坑数基・ピット群などのほか、これらに先行する庄内・布留式期の河道、縄文時代から中世期までの遺物を含む河道がある。

出土遺物は、須恵器・土師器のほか、木製品（第3図）として、未製品の刀把（1）・剣鞘（2）・弓（3）などの武器、糸杵（4）・総掛などの機織具、ナス形鍬（5）など各種農具、祭祀具としての刀形（6）などが出土した。さらに、それらの木製品製作時に生じたとみられる木のチップや、碧玉チップ、鉄滓、漆を充填したままの土師器長頸壺などが検出された。自然遺物も濠内から豊富に出土し、オニグルミ、桃などの種子、甲虫の羽根、自然木を多量に検出した。



第2図 調査地位置図 (S=1/5,000)



第3図 第2次調査出土の木製品 (S.=1/6)

以上の調査結果から、第1・2次調査地は、古墳時代中期後葉から後期前葉の居館跡とみられた。これらの調査は、これまで畿内中樞部ではほとんど知られることのなかったこの種の遺構の一端を伺うことができた点で意義深く、さらにこの居館が工房としての機能を併せもっていたことが判明したことは大きな成果であった。しかしながら、上記した遺物は全体のごく一部分であり、その大部分は基礎的な整理さえ未だ行えず、詳細な分析作業を果たせていない現状である。

第3次調査は、平成3年1月～2月に実施した。水道供給水管埋設に伴う事前調査で、総延長は320m程に及んだが、幅1.2mの狭いトレンチ調査になった。また、その南半部分は工事による掘削が盛り土内に収まるなどの理由から立会調査とし、主として発掘調査は北半部に限って行った。

調査区の北端から南に約80mはアスファルト舗装下に道路造成時の盛り土があり、直下に地山が見られた。地山の上部は既に道路工事の際削平を受けており、遺構・遺物は検出されなかった。しかし、調査区北端から約80mの地点から約95mの地点までは、暗灰色砂礫土の遺物包含層が見られ、その直下の地山上面に径30～90cm、深さ8～19cmのピット5基を検出した。遺物は、包含層出土のものは、須恵器片・土師器片であるが、須恵器については概ね6世紀代のものである。ピットの埋土からも同様の遺物が出土したが、細片であるため時期の特定は困難であった。しかし、直上の包含層の状況からみて、6世紀代である可能性が高い。これより南の立会調査実施地点においては、掘削が盛り土内に収まったか、地山にまで及んだ場合でも遺構・遺物は検出されなかった。

第3次調査は各種制約の多い調査であったが、先の居館廃絶後も遺跡としては連続しており居館とは直接関係の無い別種の遺構が広がっていることを予測させるのものであった。

第2章 調査の契機と経過

平成5年12月1日、御所市大字五百家、葛上農協同組合代表理事組合長・永田正利氏から、御所市大字名柄147-1外3筆について、埋蔵文化財発掘の届出（文化財保護法第57条の2）が提出された。工事の目的は、現在同地で営業しているガソリンスタンドの建物を解体して改築する一方、西接する空き地を新たに開発し拡張するものである。今回の開発対象面積は717.2㎡である。

当該地は、名柄遺跡（『奈良県遺跡地図』第3分冊「16-B-181」）の範囲内に相当することから、当市教育委員会は、事務所基礎、地下タンク部分、擁壁基礎、浄化槽、洗車場予定地について発掘調査を実施し、その他の部分についても調査中の状況によって調査対象にすることもあり得る旨の意見書を付して、この発掘届を奈良県教育委員会文化財保存課に進達した。対して、「周知の埋蔵文化財発掘調査包蔵地における土木工事について（通知）」があったので、「埋蔵文化財発掘調査の通知について」（文化財保護法第98条の2）を提出した。

調査対象地については、発掘届の進達後、葛上農協および御所市教育委員会で協議を行い、現在ガソリンスタンドが存在する箇所については、既設建物の基礎が深くに及んでいることや、建物以外の部分でもタンクが埋設されており遺構などは既に損壊されている可能性が高いことが確認された。そこで、この部分については工事時の立会調査とし、拡張部分である、敷地の西半部分を当面の発掘調査対象地とすることになった。結果的には、今回工事予定のタンク埋設箇所西半部分、建造物基礎の一部、洗車場のすべてを発掘調査対象とし、必要に応じて周囲の立会調査を実施した。発掘面積は約210㎡である。

以上のような経緯を経て、当市教育委員会は、葛上農協から提出された「埋蔵文化財発掘調査委託申込書」に基づいて、平成6年3月15日、同農協と、当該地についての発掘調査委託契約を締結して調査の体制を整えた。

発掘調査は、掘削による排土を敷地内に留めおく必要があったので、1区（約120㎡）および2区（約90㎡）に分けて行った（第4図参照）。調査の方法は、まず重機によって掘削、適時人力を併用して、遺構面（地山面）を検出し、その後、人力によって精査および遺構埋土の除去を行った。遺構などの平面図は、まず、遺構に番号を付すことを主な目的として1/50の平板測量図を作成、その後、1区についてはラジコン・ヘリコプターによる写真測量を行い、5cm単位のコンターラインを入れた1/20の図面を作成した。2区については調査面積やその他の状況に鑑みて、同一スケールでの実測図を作成した。なお、遺物の取り上げに際しては、当初作成の平板測量図に付した遺構番号によったが、本書作成にあたって、1・2区全体の通し番号を新たに付した。

また、土層断面図は、1区は東西南北の4面を作成したが、2区は南および西面が後世の攪乱を受けていたので、北面のみ作成した。

現地調査は平成6年4月4日着手、同年4月26日に終了した。

第3章 調査の成果

1. 層序と旧地形

水越峠付近から東に流れる水越川は、山裾付近でいったん流路を北に変え、再び東流して盆地平野部を流れる葛城川に注ぐ。今次調査地は、この再度東に流路を変えるコーナー付近に位置しており、調査地の全体的な地形は、西から東に緩やかに傾斜する一方、北を流れる水越川に向かって傾斜するものである。

調査地の現状は、旧耕作地に盛り土（クラッシャー）をして駐車場等に利用しているものであった。したがって、土層断面観察の結果も、盛り土（第1層）、旧耕作土（第2層）、旧床土（第3層）がすべての地点でみられた。第3層は耕作床土であると同時に、北東に低い当該地において、耕作地造成時に水平面を得るために入れられた盛り土である。

第3層下に遺物包含層である、第4層が認められた。第4層は色調の違いによってa～cの3層に分離し得たが、基本的には同一層であると思われる。第4図に示した土層断面図では、1区北東部分で第4層が途切れるように表現しているが、平面で連続していることを確認している。

また、同図の南壁の土層断面図に示しているように、第4層下に第6層が認められた。第6層は、やや赤みを帯びた砂礫土であり、第4層の粘質土とは性質を異にすると考えたが、平面的には大きな広がりをもたない。

その西側の地山直上には、第7・8・9層の堆積がみられる。1区の南西隅部分で認められたものであるが、後述する溝3の南端部が平面・断面いずれにおいても検出できなかったことや、この部分の地山の傾斜に変化点が認められることなどから、この一角は比較的早い段階で、攪乱を受けている可能性が高い。

2区では、第4層は東側の低い部分にのみ認められ、西半の標高が高い部分では、この土層を挟まずに旧耕作土（第2層）直下に地山が存在した。これは、本来西半部は、現状よりも標高が高い地形をなしていたものと思われるが、近代の耕作地造成に際して上面を削平して水平面を造りだしたためと思われる。したがって、本来はこの部分にも第4層は堆積していたものと考えられるが、この造成時に同時に削平されたものであろう。また、同区西端から南端部においては、大がかりな攪乱を受けていた。調査地のすぐ西隣は通称山麓線と呼称される県道御所・香芝線が通り、南側は国道309号線が走る。この攪乱は、これらの道路建設時に削平された可能性が高い。

以上のように、調査地の旧地形は西から東に、南から北に傾斜する緩やかな斜面をなし、調査地全体に遺物包含層である第4層が堆積していたものとみなすことができる。遺構はすべてこの第4層直下に存在した地山上面で検出したものである。ただし、第4層に含まれる遺物は、後述するように、古式土師器を中心とするものの、中世期の遺物も含まれており、必ずしも単一時期の単純層ではない。なお、地山の土質は赤褐色粘質土または粘土であった。

2. 遺構

遺構は、1区・2区を通じて、ピット68基、溝4条を検出した。

ピットの計測値については、第1表にまとめた。長径20数cm～40数cmのものが多い。深さは、6～61cmまでであるが、20cm前後を中心に10～30cmのものが多い。

埋土は、いずれも粘質土であり、色調の違いによって4種類に分けられた。多くのピットでは埋土の分層が不可能であって、柱痕を認めることができなかった。ただし、2区のピット63については、暗灰褐色粘質土の掘りかた埋土に対して、灰色粘質土としての柱痕跡が認められた。これによれば、柱の直径は15cmである。

埋土色調の違いは時期差を反映している可能性があるが、ピットからの出土遺物がほとんど無かったのでそれを検証することはできない。埋土の違いでの分布をみると、暗灰色粘質土(38基)と暗灰紫色粘質土(17基)が多く、前者は1・2区全体にみられたが、後者は1区のみで検出された。色調の違いを考慮しなければ、ピット14・16・21など、直線状に並ぶピットも見受けられるものの、建物等の配置を復元的に確認することはできなかった。

番号	長径	短径	深さ	埋土	備 考
1区					
1	(21)	(20)	24	A	溝3に切られる
2	(37)	(35)	39	B	溝3に切られる
3	26	(22)	19	C	溝3に切られる
4	17	16	23	A	
5	13	12	18	B	
6	56	35	37	A	
7	27	24	43	A	
8	23	19	26	A	
9	32	29	25	A	
10	29	27	25	B	
11	(43)	(26)	(28)	B	溝2に切られる
12	(18)	(16)	48	B	溝2に切られる
13	31	27	18	A	
14	27	24	26	A	
15	23	18	24	C	
16	29	14	21	A	
17	33	28	57	A	
18	25	23	12	B	
19	31	(25)	19	A	溝3に切られる
20	23	20	19	B	
21	43	33	33	C	
22	24	20	15	B	
23	43	20	61	D	
24	33	31	24	B	
25	21	19	18	B	
26	26	22	25	A	
27	26	24	46	A	
28	32	30	16	B	炭化物出土
29	16	14	13	A	
30	24	21	20	C	
31	15	14	17	A	
32	32	26	36	A	
33	8	6	16	A	
34	22	20	24	B	
35	37	27	20	B	
36	22	20	46	D	
37	(38)	(29)	21	B	溝1に切られる

番号	長径	短径	深さ	埋土	備 考
38	23	22	19	B	
39	26	26	22	B	
40	32	28	20	B	
41	32	30	28	B	
42	22	20	19	D	
43	24	23	6	D	
44	22	20	21	D	
45	30	27	17	B	
46	45	27	26	B	炭化物出土
47	37	33	28	B	
2区					
48	32	29	20	C	
49	31	27	15	C	
50	28	24	10	B	
51	22	21	19	B	
52	37	35	14	B	
53	17	15	10	B	
54	28	25	29	B	
55	23	22	12	B	
56	21	20	9	B	
57	18	15	15	B	
58	20	16	27	B	
59	27	18	55	B	
60	33	21	31	B	
61	21	18	20	B	
62	15	14	23	B	
63	32	17	20	C	柱痕(灰色粘質土)あり
64	24	23	10	B	
65	41	30	12	B	
66	36	33	36	B	
67	17	16	8	B	
68	29	26	30	B	

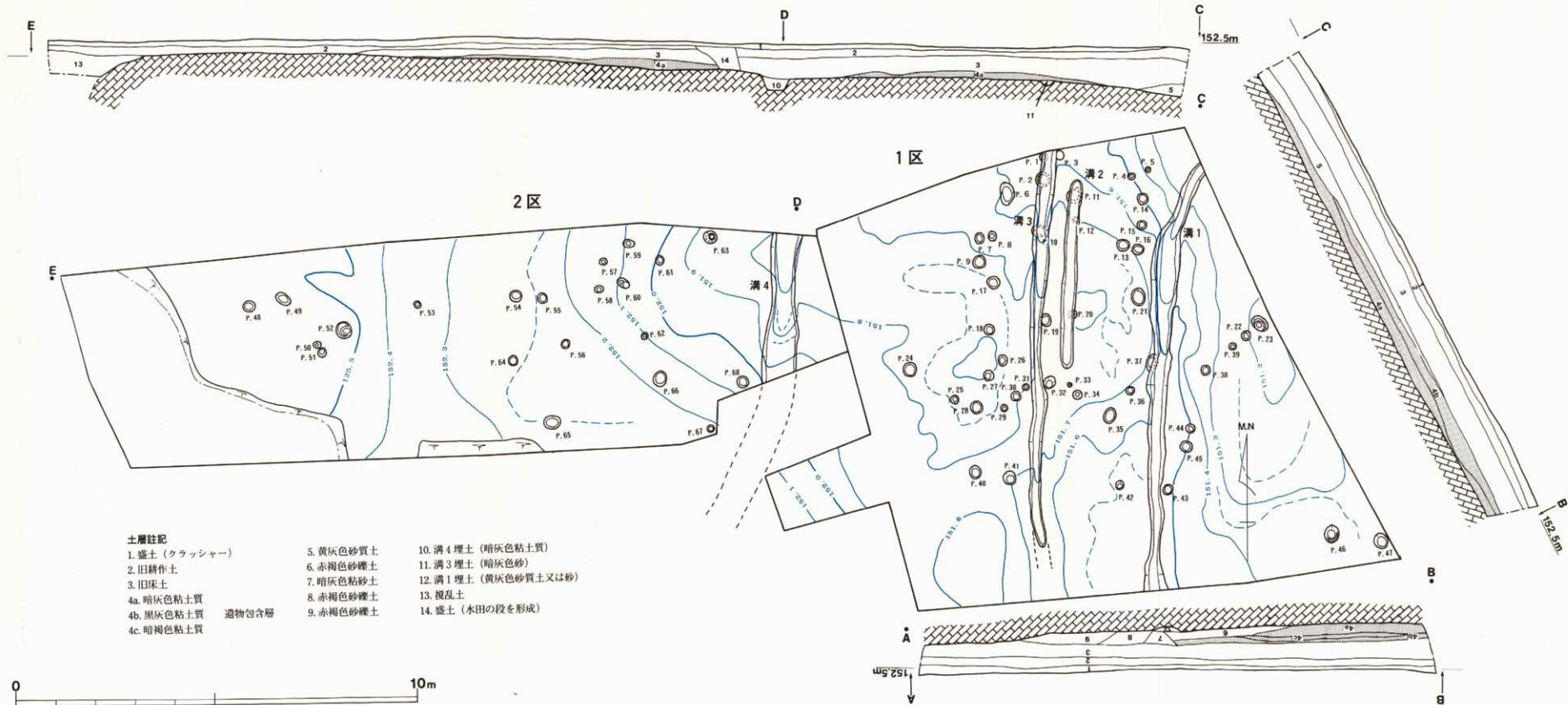
凡例 数値の単位はcm。

括弧内数値は、それ以上であることを示す。

埋土: A; 暗灰紫色粘質土 B; 暗灰色粘質土

C; 暗灰褐色粘質土 D; 黒灰色粘質土

第1表 ピット計測表



第4図 調査地平面図および断面図 (S. = 1/60)

溝1は、1区の東半部分を南北に横断するように検出された。検出長は10.5m、幅はやや広い所もあるが、平均的には40cm程度である。深さは10cm前後である。

溝2は、1区西半で検出した。検出長4.7m、幅30～35cm、深さ10cm弱である。

溝3は、1区のほぼ中央で検出した。前記のように、南端部分は削平を受けていると考えられ、検出できなかった。検出長は9.8m、幅30～45cm、深さ10～20cmを測る。

溝4は、2区の東端部分で検出した。検出長3.5m、幅55～80cm、深さ20～30cmを測る。溝4を検出した地点のすぐ南側は、1区の写真撮影終了後に拡張した部分に相当するが、この箇所での調査で溝4の延長を認めることができなかった。したがって、この溝は南方向には、西側に湾曲しているものと理解される。

溝の埋土は、いずれも分層不可能であって、1層のみの堆積と認識された。溝1・3の埋土は、いずれも灰色系の砂質土もしくは砂である。溝2・溝4の埋土は暗灰色粘質土であって、溝1・3とは様子が異なる。

1区で検出した溝1・2・3は、いずれも南北方向に並行して伸びる浅い溝という点では共通しており、一見すれば、中・近世のいわゆる素掘り溝のような印象を受ける。しかし、溝1・3と溝2の差異は、上記のような埋土の違いだけでなく、遺構の状態にもいえることで、溝1・3は長く調査区を横断するように伸びるが、溝2は短く終わる。後述する出土遺物を見ると、溝1の埋土からTK43型式の杯身に類似する高杯杯部が出土し、溝3の埋土からも6世紀代の須恵器が出土している。そして、この2条の溝はそれ以降の新しい遺物を含んでいなかったことから、溝1・3の形成時期は、それぞれ当該期に求めたい。

溝2のみをいわゆる素掘り溝であると断じることはできず、その性格は把握し難い。ただ、埋土が共通する溝4については、瓦器片が1点出土した。これをもって断定することは危険であるが、溝2・4ともに中世期に下る可能性が高い。

さて、ピットの形成時期については、さらに出土遺物が少なく特定が困難である。これを考える手掛かりには、遺構の切り合い関係がある。すなわち、ピット37は溝1に、ピット11・12・20は溝2に、ピット1・2・3・10・19は溝3に、それぞれ切られていることが明らかになった。この状況から、ピットの形成時期が溝に先行するものであることが判る。なお、溝3に切られるピットの埋土は、認められた4種の埋土のうち3種までを含んでいることから、多少の時期差を有する可能性があると考えたピットのほとんどすべてについて、溝に先行することがいえるものである。このようにして、ピット形成時期の下限を押さえることができるが、その上限については、遺構検出面の直上に堆積する第4層に庄内式を最古とする古式土師器を含むことから、当該期におくことができよう。かなりの時間幅をもって考えることになるが、ピット埋土からの出土遺物が少ないこと、同一面に時期差のある遺構が存在すること、直上の遺物包含層が単純層でないこと、などの条件の元では致し方ないことであろう。

3. 遺物

検出した遺物は、古式土師器を中心としてコンテナに3箱ほどである。可能な限り実測図を作成し、土器25点・石製品3点が掲載できた。出土土器は、土師器・須恵器があるが、包含層（第4層）出土の古式土師器がその大部分を占める。

詳細は第2表出土土器観察表（15～19ページ）に記すが、同表および本文中、土器の形・型式分類法・年代観は、古式土師器については寺沢薫編『矢部遺跡⁽⁵⁾』に、須恵器は田辺昭三『陶邑古窯址群⁽⁶⁾』、中世土器は松本洋明編『十六面・薬王寺遺跡⁽⁷⁾』にそれぞれ準拠した。

また、胎土の観察については、近年御所市内の遺跡の発掘調査報告書として刊行された、『橋原遺跡⁽⁸⁾Ⅰ』・『橋原遺跡⁽⁹⁾Ⅱ』と同様に、『矢部遺跡』で採られた方法を援用した。したがって、観察に際しては『矢部遺跡』などで使用された顕微鏡と同一機種である、ナショナルライトスコープF F-393（×30）を使用した。

遺物の実測図は、土器を1/3のスケールに、石製品は1/2に統一して第5～10図に示した。この際、土師器の断面は白抜きとし、須恵器は黒ぬりで示した。また黒塗の範囲はトーンで示している。

①各遺物の所属時期

遺物包含層出土遺物は、(1)～(21)である。1・2区それぞれから出土したが、既述のように第4層として同一層と認識できるものである。

(1)・(5)～(7)は甕である。口縁部の形態を見ると、(1)・(5)がg₁手法を、6はe₁手法を用いる。(7)は特殊な口縁形態を示し、内面を肥厚させ全体に丸く収める。これは『橋原遺跡Ⅱ』で報告した(74)と同様の手法によるものである。e₁手法は庄内3式から布留1式に見られ、g₁手法は布留式を通じて見られる手法である。

(2)は小形丸底甕である。口縁部の遺存部分から判断すると、A形式に相当するものと思われる。A形式は、庄内3式から布留式を通じて見られる。

(4)は広口壺口縁部である。わずかな遺存部分からB形式かと判断したが、C形式かも知れない。広口壺は布留1式まで存続するが、庄内3式をもって激減するとされる。

(8)～(18)は高杯である。杯部の形態がある程度判る(8)～(12)のうち、(8)～(11)はE₁形式、12はB₁形式である。浅い碗状の杯部をもつE₁形式は古式土師器では一般的でないといわれるが、庄内0式から布留0式まで散見されるという。またB₁形式は布留式以降に認められる。一方、脚柱状部の形態が判るものでは(16)・(18)があり、いずれも4-A-c形式とみられる。この形式はB₁形式の脚部として布留2式以降一般的になる。

(19)は、小形丸底鉢である。I-A₁-a形式である。IA形式は、庄内式を通じてみられるが、布留式段階に消長する。

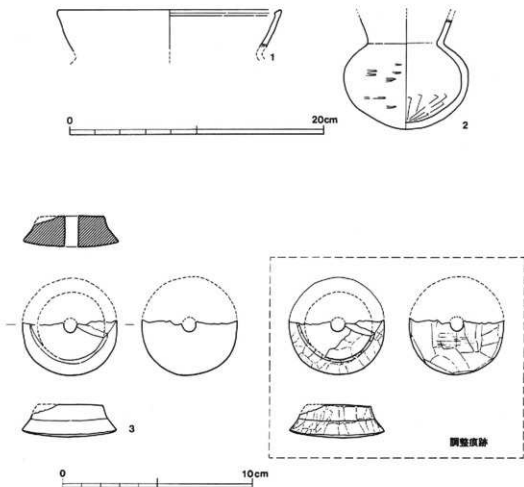
(20)は、甌または鍋である。この器種は「布留式直後様式」に出現し、それ以降存続するもの

であり、現状では細別した時期比定は難しい。

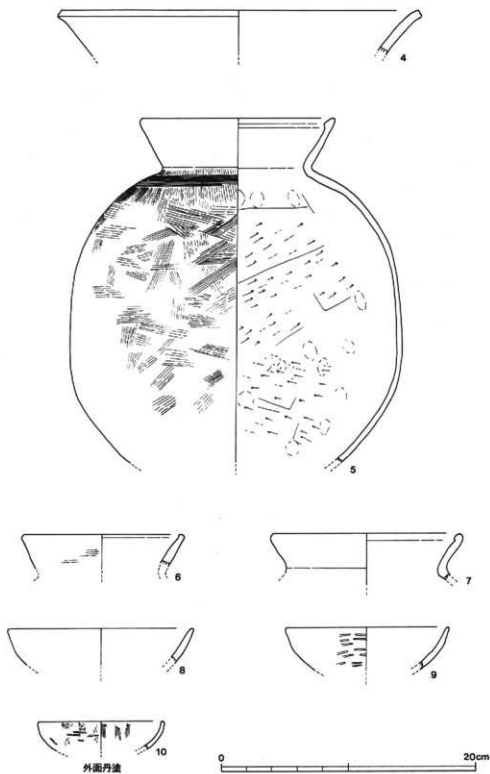
(21) は、土釜広口B-II型である。13~14世紀に目立つ器種である。

遺物包含層(第4層)出土遺物には、以上の土器のほか滑石製紡錘車(3)がある。底部径5.0cm、頂部径3.4cm、高さ1.7cmを測る。外面には文様を有さない。京都府下出土の紡錘車を集成された國下多美樹氏の分類によれば、(3)は側面下部が消失し、全体が台形状を呈するI d類に相当する。また國下氏はこのI d類の所属時期について、類例が少なく詳細は明らかではないとされながらも、その出現期を6世紀前葉と推定されている。しかし、奈良県下の類例をみると、例えば、榛原町野山遺跡群池殿奥文群4号墳の東棺が埋葬されていた主体部では、3個体の紡錘車が出土しており、側面下部を作るものと作らないものが一括で出土している。当該資料はTK23型式の須恵器と共伴する。

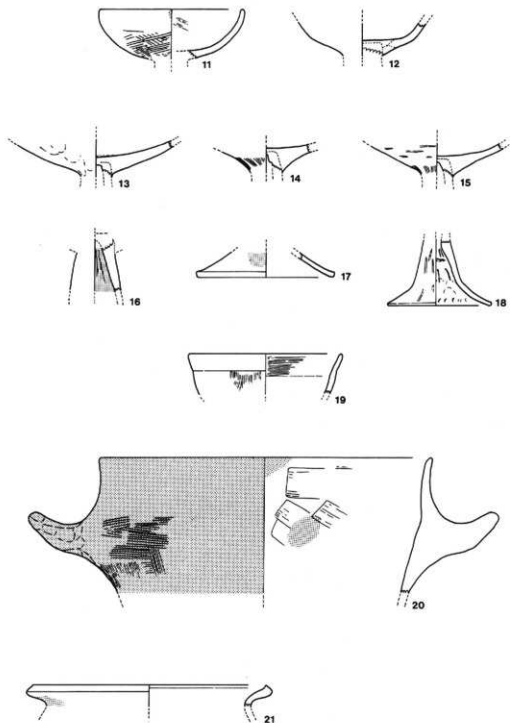
一方、御所市近辺での滑石製紡錘車の出土例としては、新庄町寺口忍海古墳群E-21号墳や、同



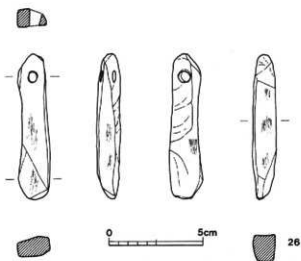
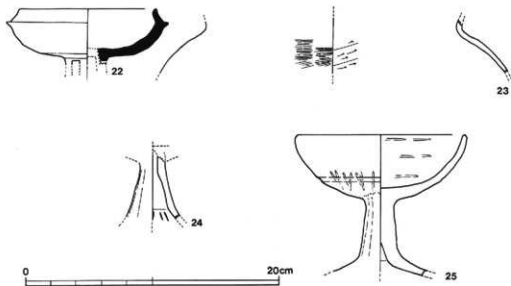
第5図 出土遺物1(1区第4層) 1・2 : S. = $\frac{1}{3}$, 3 : S. = $\frac{1}{2}$



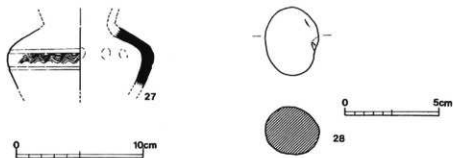
第6図 出土遺物2 (2区4a層(その1)) S. = 1/3



第7図 出土遺物3 (2区4a層(その2)) S. = 1/2



第8図 出土遺物4 (溝1) 22~25; S. = $\frac{1}{8}$, 26; S. = $\frac{1}{2}$



第9図 出土遺物5 (溝3) S. = $\frac{1}{8}$

第10図 出土遺物6 (ピット54) S. = $\frac{1}{2}$

町寺口千塚古墳群4号墳出土の資料が知られるが、いずれも外面に鋸歯文を施し、全体の形状としては側面下部を作り出す截頭円錐形を呈する点で(3)とは異なる。共存する須恵器は、前者はTK47型式に、後者はMT15型式に併行するとされる。

野山遺跡群池殿奥支群4号墳出土のI d類のものは、今次調査出土の(3)より小形であり、全体的な形状も底部径の割合に高さが高い、底部径の割合に頂部径が小さいなどの違いが見受けられる。また、外面全体に線刻による文様がある点も異なる。ただし、この文様の有無については、國下氏や、三重県下出土の紡錘車を集成された河北秀実氏の編年的作業によっても、必ずしも有文のものから無文のものへ変遷するものではないことが明らかになっている。

以上のように、現状では(3)の所属時期の確定は難しい。その上限を5世紀後半期にあるものとしたい。

(22)～(25)は、溝1出土遺物である。(22)は須恵器高杯杯部、(23)は土師器甕、(24)・(25)は土師器高杯である。(23)～(25)の編年の位置付けは難しいが、(22)の高杯杯部は、立ち上がりの形状などがTK43型式の杯身に似る。

溝1出土遺物には、以上の土器のほか、石製品として砥石(26)がある。長さ7.7cm、幅(最大)1.8cm、厚さ1.3cmを測る。一端に径0.5cmの円孔を片側から穿つ。各面とも使用された痕跡が残るが、円孔の軸方向に平行する面は特に使いこなされて浅く窪む。溝1の埋土中から検出されたことから、6世紀後半に下限をもつといえる。

(27)は溝3出土遺物である。須恵器甕の体部と思われる。詳細な所属時期は不明であるが、残存部から想定できる頸部下端部と体部最大径の比率などからみれば、6世紀代以降のものであろう。

(28)はピット54から出土した、石製のいわゆる投弾である。長さ3.6cm、幅2.9cm、厚さ2.5cm、重さ36gである。

②搬入土器について

この節の冒頭に述べたように、以上の出土土器のすべてについて、その胎土を観察し、観察表に記した。

今回胎土観察をなし得た土器は、個体数が25個体と少なく、これをもって在地土器胎土を抽出することは難しい状況である。

しかし、藤田和尊氏は、「楡原遺跡I」で出土遺物218点の観察から、楡原遺跡在地の土器の典型的な胎土は、「石英M-S・3～4、長石M-S・3、角閃石S・3、雲母S・2、チャートS・0～1」で、赤色斑粒については堯がS・0～1、それ以外の器種がM-S・1～2である」との結果を示されている。今回観察した土器胎土を、この楡原遺跡で抽出された類型に照らして考えた場合、石英・長石の粒子が多少大きめである個体もあるものの、各鉱物の組成・割合としては、観察した25個体のうち22個体(88%)が、この類型に合致した。楡原遺跡は、当遺跡と同様、葛城山

東麓部に位置し、当遺跡から北東約1.5kmの至近距離に所在する。このような状況からも、当遺跡における在地土器の胎土は、檜原遺跡で抽出したものに合致すると考える。

このようにして搬入土器と認定できた土器は、(4)・(7)・(11)の3個体である。いずれも2区4a層出土のものであって、その器種はそれぞれ壺・甕・高杯である。個体数が少ないこと、いずれも遺物包含層出土資料であることから、これ以上の考察の対象としたいが、(7)の、特殊な口縁手法をもつ甕が搬入土器であることは注意される。前述のように、この手法を用いる甕は、『檜原遺跡Ⅱ』においても検出されているが、これは在地産の土器であった。現状では、いずれも良好な一括資料として検出されたものではないため、詳細な時期比定すら困難な状態である。この種の手法を用いる甕の製作地の問題を含めて今後の課題とせざるを得ない。資料の増加を待ちたい。

第4章 まとめ

名柄遺跡の発掘調査は、今回で4次を数えることになったが、第1・2次調査では、5世紀後葉から6世紀前葉にかけての居館の一角を明らかにしたものと注目された。第3次調査は、その居館の西側の地点で行ったものであった。小規模な調査であったが、6世紀代とみられるピット数基を検出している。

今回の調査ではピットの形成時期を必ずしも明確にできなかった。当該地点は居館の外周部に位置するが、出土遺物に第1・2次調査で検出された居館に並行する時期のものがほとんど含まれなかったことから、検出したピット群がその付属施設などに関わるものであるとは考えられない。むしろ、居館に先行して集落が営まれていた可能性もあり、居館はこのような集落を基礎としてその中に形成されたものかも知れない。また、第3次調査の成果を含めて考えると、居館廃絶後もその周囲になお集落が形成されていたものと考えられる。

名柄遺跡はその内に居館を含む点で古墳時代の集落としては特異な存在であるが、居館周囲の状況はなお明確ではない。この点でも今回の調査でその一端が知り得たことは有意義なことである。そして、そのような、古墳時代の集落の中でも重要な位置を占める名柄遺跡の全体像を知るうえで、今後ともこのような調査の積み重ねが重要であることは言うまでもない。

第2表 出土土器観察表

博物館 番号	遺構 層位	器種	形式	法量と調整	色調	胎				備考
						石	長	内	外	
5-1 図版3	1区 第4層	壺 (布留彩)	---g	法量と調整 ・1頸部 ・体部(舞台部) ・底部(舞台部) 口径 17.6cm (残存1/18からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 ・内面 ヨコナデ。	淡赤褐色	石 1 長 1 内 M 外 S	胎 1 長 S 内 M 外 S	胎 1 長 S 内 M 外 S	胎 1 長 S 内 M 外 S	備考
5-2 図版5	1区 第4層	小形 丸底壺	A?	法量と調整 ・頸径 6.0cm ・外面 ヨコナデ。 ・内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコナデ後、ヨコ方向のヘラミガキ (幅1.5mm)。 ・内面 ヨコナデ後、ヨコ方向のヘラミガキ (幅1.5mm)。 ・外面 ヨコナデ後、ヨコ方向のヘラミガキ (幅1.5mm)。 ・内面 ヨコナデ後、左廻りの板ナデ	淡赤褐色	石 1 長 1 内 M 外 S	胎 1 長 S 内 M 外 S	胎 1 長 S 内 M 外 S	胎 1 長 S 内 M 外 S	器面摩滅著しい
6-4 図版3	2区 第4a層	壺	H-B?-b	法量と調整 口径 28.1cm (残存1/8からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 ・内面 ヨコナデ。	乳赤褐色	石 1 長 1 内 M 外 S	胎 1 長 S 内 M 外 S	胎 1 長 S 内 M 外 S	胎 1 長 S 内 M 外 S	撤入土器 チャート大さく、 多い。
6-5 図版5	2区 第4a層	壺 (布留彩)	I-B-5g	法量と調整 口径 14.4cm (残存1/4からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 ・内面 ヨコナデ。 ・外面 不足方向のハケ (5条/cm)。 ・内面 指頭による押し後、上半部は左廻り のヘラケズリ。下半部は右廻りのヘ ラケズリ。	淡赤褐色	石 1 長 1 内 M 外 S	胎 1 長 S 内 M 外 S	胎 1 長 S 内 M 外 S	胎 1 長 S 内 M 外 S	
6-6 図版3	2区 第4a層	壺	---o	法量と調整 口径 12.4cm (残存1/10からの回転復元) ・外面 ヨコナデ後、ヨコ方向のハケ (5条 /cm)。 ・内面 ヨコナデ。	灰褐色	石 1 長 1 内 M 外 S	胎 1 長 S 内 M 外 S	胎 1 長 S 内 M 外 S	胎 1 長 S 内 M 外 S	

挿 お よ び 図 番 号	図 版 号	遺 構 層 位	器 種	形 式	法 量 と 測 量	色 調	片				備 考
							石 長	石 間	雲 母	赤 色 斑 紋	
6-7 図版3	2区 第4a層	要	E ₁ ---a	口径 14.8cm (残存1/6からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 ・内面 ヨコナデ。	乳赤褐色	L S S ④ — M 1 3 0	—	—	—	—	挿入土器 チャート大きく多い。 長石小さくやや少ない。 角閃石やや少ない。
6-8 図版3	2区 第4a層	高杯	E ₁ ---a	口径 14.6cm (残存1/10からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 ・内面 ヨコナデ。	淡赤褐色	M ④ S ⑤ L 3 2 1 0 2	—	—	—	—	
6-9 図版3	2区 第4a層	高杯	E ₁ ?---a	口径 12.8cm (残存1/11からの回転復元) ・外面 ヨコナデ後、ヨコ方向のヘラミガキ (幅1mm)。 ・内面 ヨコナデ。	赤褐色	S S S ⑤ 2 2 2 3 0 2	—	—	—	—	
6-10 図版3	2区 第4a層	高杯	E ₁ ---a	口径 10.0cm (残存1/7からの回転復元) ・外面 タテ方向のハケ (9条/cm) 後、 ヨコナデを施し、後ヘラミガキ (幅 1mm)。 ・内面 タテ方向のヘラミガキ (幅1mm)。	赤褐色	M M S ⑤ L M — M 1 1 2 2 3 2 1 1 2	—	—	—	—	丹塗 器面の磨滅著しい。
7-11 図版3	2区 第4a層	高杯	E ₁ ---a	口径 10.2cm (残存1/7からの回転復元) ・外面 不定方向のハケ (6条/cm) 後、ヨ コナデ。 ・内面 ナナメ方向のハケ (6条/cm) 後、 ヨコナデ。	赤褐色	L M L S — M 1 1 2 3 3 3 2 2 0	—	—	—	—	挿入土器 チャート日立つ。

国 および 図版 番号	遺 構 層 位	器 種	形 式	法 量 と 調 整	色 調	寸 法				備 考	
						石 長	内 径	口 径	赤 色 土 厚		上 の 他
7-12 図版3	2区 第4a層	高杯	B.7-1-1	<ul style="list-style-type: none"> 口頸部 ・体部 ・底部(脚台部) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・外面 不定方向のナデ。 内面 指頭による押圧後、ヨコナデ。	淡赤褐色	石 長 実 石	内 径 石	口 径 石	赤 色 土 厚	そ の 他	
7-13 図版3	2区 第4a層	高杯		<ul style="list-style-type: none"> ・外面 指頭による押圧後、ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。黒斑 	淡赤褐色	L L	M M	⑤	M		
7-14 図版3	2区 第4a層	高杯		<ul style="list-style-type: none"> ・外面 タテ方向のハケ(9条/cm)後、ヨコナデ。 内面 指頭による不定方向のナデ。 	赤褐色	M M	M M	S S	M M		
7-15 図版3	2区 第4a層	高杯		<ul style="list-style-type: none"> ・外面 ヨコナデ後、ヨコ方向のヘラミガキ(幅1cm)。 内面 ヨコナデ。 ・外面 指頭による押圧後、タテ方向のハケ(9条/cm)後、ヨコナデ。 内面 指頭による不定方向のナデ。 	赤褐色	M M	M M	S S	M M		
7-16 図版4	2区 第4a層	脚台 (高杯)	4?-A-c	<ul style="list-style-type: none"> ・外面 器面磨滅のため、調整不明。 内面 器面磨滅のため、調整不明。シボリ片残存。黒斑。 	乳赤褐色	M M	M M	S S	⑤		器面磨滅著しい。

図 お よ び 図 版 番 号	遺 構 層 位	器 種	形 式	法量と調整	色 調	結				備 考
						石	長 角 閃	菱 晶 石 母	赤 色 斑 点	
7-17 図版4	2区 第4a層	駒台 (高杯)		法量と調整 ・ 口頸部 ・ 腰部 ・ 底部 (駒台部) 縮径径 10.6cm (残存1/6からの回転復元) ・ 外面 ヨコナデ。黒莖。 ・ 内面 ヨコナデ。	赤褐色	L M S — M	M M	M M		
7-18 図版4	2区 第4a層	駒台 (高杯)	4-A-c?	縮径径 8.1cm (残存1/5からの回転復元) ・ 外面 指頭によるタテ方向のナデ後、タテ 方向のヘラミガキ (幅1.5mm)。縮 径はヨコナデ。 ・ 内面 指頭によるタテ方向のナデ。 シボリ目残存。縮径は指頭による押 圧後、ヨコナデ。爪跡が顕著に残る。	赤褐色	L M S — S	S M M	M M		
7-19 図版4	2区 第4a層	小型丸底 鉢	I-A ₁ -a	口径 12.0cm (残存1/12からの回転復元) ・ 外面 ヨコナデ。 ・ 内面 タテ方向のハケ (8条/cm)。 ・ 外面 タテ方向のハケ (8条/cm)。 ・ 内面 ヨコナデ。	暗褐色	L M S — M	M S	M S		
7-20 図版4	2区 第4a層	甌 or 鍋	—	口径 26.0cm (残存1/10からの回転復元) ・ 外面 ヨコナデ。黒莖。 ・ 内面 タテ方向のハケ (6条/cm)後、ヨ コナデ。 ・ 外面 タテ方向のハケ (6条/cm)後、ヨ コナデ。把手部は指頭による押圧ま たは小径方向のナデ。黒莖。 ・ 内面 ナメメ方向の板ナデ。黒莖。	黄褐色	L M L — M	L M	M M		
7-21 図版4	2区 第4a層	土釜	広口 B-II型	口径 18.2cm (残存1/14からの回転復元) ・ 外面 ヨコナデ。黒莖。 ・ 内面 ヨコナデ。	乳灰色	S S S — S	S S S	S S S		

標 図 および 図 版 番 号	遺 構 層 位	器 種	形 式	法量と調整	色 調	結				備 考
						石 長	向 閃	赤 色 斑 粒	そ の 他	
8-22 図版5	1区 溝1	高杯	TK43型式	<ul style="list-style-type: none"> 口径 10.6cm (残存1/4からの回転復元) 外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。下半部はヘラケズリ後、ヨコナデ。(ロクロ回転方向は左廻り)。 内面 ヨコナデ。 脚部は調整不明。長方形のスカシを3方に配す。 	濃灰色	S M	S	⑤		
8-23 図版4	1区 溝1	甕		<ul style="list-style-type: none"> 胴部径 20.0cm (残存1/20からの回転復元) 外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 外面 ヨコナデ。 内面 右廻りのヘラケズリ。 	暗黄褐色	L M	S	⑤	M	
8-24 図版4	1区 溝1	脚台 (高杯)	4-A	<ul style="list-style-type: none"> 外面 タチ方向のヘラケズリ後、ナデ。 内面 ヨコナデ。下半部にはシボリ目残存。 	赤褐色	M M	S	⑤	M L	
8-25 図版5	1区 溝1	高杯	—	<ul style="list-style-type: none"> 口径 13.2cm (残存1/6からの回転復元) 外面 ヨコナデ後、タチ方向のヘラミガキ(幅2mm)。 内面 ヨコナデ後、ヨコ方向のヘラミガキ(幅2mm)。 外面 ヨコナデ後、タチ方向のヘラミガキ(幅2mm)。 内面 ヨコナデ後、ヨコ方向のヘラミガキ(幅2mm)。 外面 柱状部はタチ方向のヘラミガキ後ナデ。 内面 柱状部は未調整。裾部はヨコナデ。 	赤褐色	S M	S	⑤	M	
9-27 図版4	1区 溝3	甕		<ul style="list-style-type: none"> 外面 ヨコナデ後、裾部は8条(8条/cm)を隔す。 内面 指頭による押圧後、ヨコナデ。 	濃灰色	S S	S	⑤		

文献註・補註

- (1) 藤田和尊『橿原遺跡Ⅰ』（『御所市文化財調査報告書』第17集、1994年）
木許 守『橿原遺跡Ⅱ』（『御所市文化財調査報告書』第18集、1994年）
- (2) 関川高功『御所市室大塚外塚』（『奈良県遺跡調査概報』1988年度、1989年）
木許 守『奈良県御所市室中西遺跡—第2次発掘調査報告—』（『御所市文化財調査報告書』第9集、1990年）
木許 守『奈良県御所市室中西遺跡—第3次発掘調査報告—』（『御所市文化財調査報告書』第10集、1991年）
- (3) 尼子奈美枝 編『奈良県御所市佐田遺跡7次発掘調査報告』（『御所市文化財調査報告書』第15集、1993年）
木許 守『奈良県御所市佐田遺跡範囲確認調査報告』（『御所市文化財調査報告書』第16集、1993年）
坂 靖『御所市佐田遺跡（南郷・井戸地区）発掘調査概報』（『奈良県遺跡調査概報』1993年度、1994年）
- (4) 坂 靖『御所市南郷遺跡発掘調査概報』（『奈良県遺跡調査概報』1992年度、1993年）
- (5) 坂 靖『御所市下茶屋遺跡発掘調査概報』（『奈良県遺跡調査概報』1993年度、1994年）
- (6) 島本 一『琴柱形石製品の新例』（『考古学雑誌』第28巻6号、1938年）
- (7) 秋山日出夫・網子善教『塚大塚』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第18冊、1959年）ほか
網子善教『鐘子塚古墳』（『御所市史』、1965年）
- (8) 南葛城地域の古墳文化研究会『奈良県御所市扱上鐘子塚 測量調査報告』、1986年
梅本竹夫『御所市扱上鐘子塚 前方部周濠発掘調査概報』（『奈良県遺跡調査概報』1977年度、1978年）
木許 守『奈良県御所市柏原扱上鐘子塚古墳第2次発掘調査報告』（『御所市文化財調査報告書』第14集、1992年）
- (9) 藤田和尊編『奈良県御所市室ヶ勢山境谷10号墳発掘調査報告』（『御所市文化財調査報告書』第4集、1986年）
藤田和尊編『奈良県御所市巨勢山古墳群Ⅱ』（『御所市文化財調査報告書』第6集、1987年） ほか
- (10) 高橋健白『南葛城郡名柄發掘の銅鐸及銅鏡』（『奈良縣史蹟地名調査會報告書 第6回』、1921年）
- (11) 藤田和尊『奈良県御所市名柄遺跡』（『日本考古学年報』42（1989年度版）、1991年）
- (12) 名柄遺跡第1・2次調査などの整理作業の現状などについては、藤田和尊「おわりに」（前掲書（1）文献）参照。
- (13) 出辺昭三『陶器古墳址群Ⅰ』（『平安学国考古学クラブ研究報告』第4号、1966年）
- (14) 寺沢 薫編『矢部遺跡』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第49冊、1986年）
- (15) 田辺昭三（前掲書（13）文献）
- (16) 松本洋明編『十六面・薬王子遺跡』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第54冊、1988年）
- (17) 藤田和尊（前掲書（1）文献）
- (18) 木許 守（前掲書（1）文献）
- (19) 岡下多美樹『京都府下の紡錘車について』（『京都考古』第50号、1988年）
- (20) 井上義光・仲富美子編『野山遺跡群Ⅰ』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第56冊、1988年）
- (21) 前掲書（20）文献、167頁、図191-1・3
- (22) 前掲書（20）文献、167頁、図191-2
- (23) 吉村幾温・千賀 久編『寺口忍海古墳群』（『新庄町文化財調査報告書』第1冊、1988年）
- (24) 坂 靖編『寺口塚古墳群』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第62冊、1991年）
- (25) 河北秀夫『三重県出土のいわゆる紡錘車の形態とその時期』（『Mie history』vol. 3、1991年）
- (26) 『矢部遺跡』では、土器の胎土中に含まれる鉱物の大きさ・量について各5段階の基準が設定されている。本書もこれに基づいて観察表に記したので、以下にこの基準を転載する。
鉱物の大きさ
①=肉眼観察でも径1.0m/m以上の砂粒として観察できるもので、スコープ内ではその多くを占める巨大な塊と見られるもの。
L=肉眼観察では径1.0m/m前後に確認できるもので、スコープ内では大きな塊として見られるもの。
M=肉眼観察において径0.5m/m程度に確認できるもので、スコープ内では大きな粒子として確実に観察されるもの。
S=肉眼では殆ど判明できないが、スコープでは小さな粒子として十分観察しうる。
⑤=肉眼では全く分からない。スコープではピンホール程度にかすかに観察できる。
鉱物の量
0=観察では全く確認できなかったが、殆ど存在しないに等しい。
1=極めて稀少であり、スコープ内に入らないこともままある。点在。
2=少ない。スコープ内には必ず入ってくるが、その量は数えられる程度である。散在しない偏在。
3=スコープ内には必ず入り、数えられる量ではない。普遍的に認められるが、間隔は粗である。
4=多い。スコープ内に際立って目立つ存在である。普遍的に認められ、その間隔は密である。
5=極めて多量である。スコープ全面に密集してみられる。鉱物が互いに接するものもある程である。
- (27) 藤田和尊（前掲書（1）文献、91頁）

報告書抄録

ふりがな	なごりてき たいし ぶつ(つち)ほりく							
書名	名柄遺跡 第4次 発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	御所市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第19集							
編著者名	木許 守							
編集機関	御所市教育委員会							
所在地	〒639-22 奈良県御所市三室117番地 TEL. 07456-2-3001(内412)							
発行年月日	西暦 1995年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
名柄	奈良県御所市 大字名柄	29208		34度 26分 20秒	135度 43分 10秒	19940404～ 19940426	210	ガソリンスタンド増設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
名柄	集落	古墳時代 前期～ 後期	ピット	68		第1・2次調査で検出の居館外周部で集落の広がりを確認。 ただし、居館との厳密な併行関係などは不明。		
		古墳時代 後期	溝	2 須恵器 砥石				
			遺物包含層	土師器 滑石製紡錘車				

版 圖



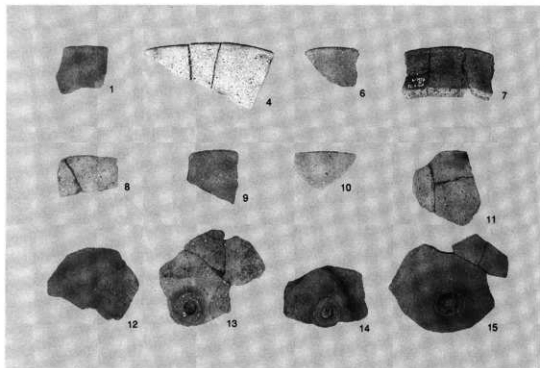
名橋遺跡 航空写真（東から）



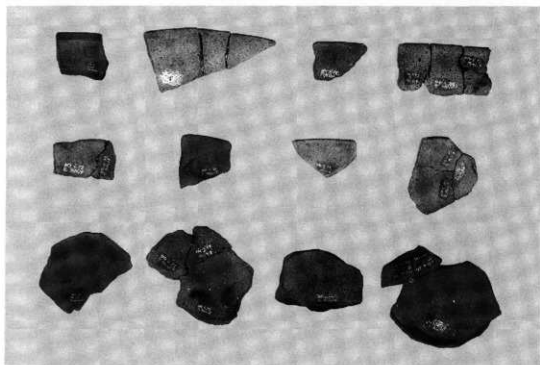
1 区 全 景 (西から)



2 区 全 景 (東から)

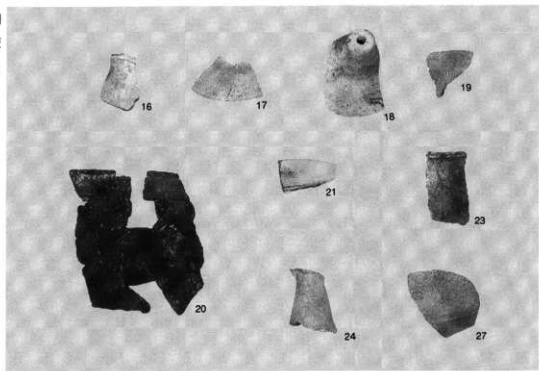


(外 面)

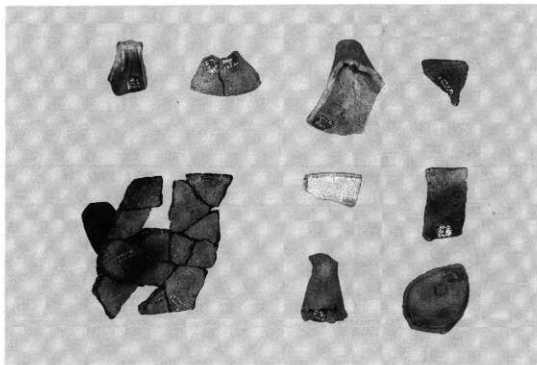


出土遺物 1 (S. \approx $\frac{1}{6}$)

(内 面)

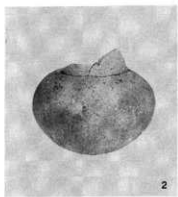


(外面)



出土遺物 2 (S. 与 1/5)

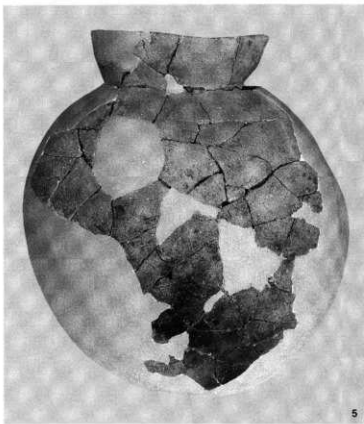
(内面)



2



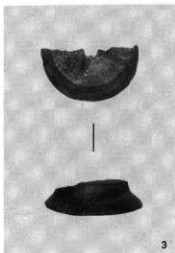
22



5



25



3



26



28

出土遺物 3 (2 · 5 · 22 · 25 ; S. $\approx \frac{1}{3}$, 3 · 26 · 28 ; S. $\approx \frac{1}{2}$)

奈良県御所市

名柄遺跡 第4次 発掘調査報告

御所市文化財調査報告書 第19集

平成7年(1995年)1月31日

編集・発行 御所市教育委員会

御所市三室117番地

印刷 株式会社 笹田印刷所

御所市今住16-3

奈良女子大学附属図書館